



2012 年 7月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く45

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 37 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 涼しさや人さまさまの不恰好 正岡子規

甚平を着て人間が軽くなり 八木健

礼服を脱ぎステテコに変身す 八木健

全裸にあらむ究極のクールビズ 八木健

先日の「天声人語」に、「六月無礼」と言う言葉の引用があり、陰暦六月の酷暑の時期に服装が多少乱れてもその無礼をとがめることなく大目に見てもらえる事の意で、古くは平家物語にも出てくる味わい深い古語であると説明されていました。この数日の急な暑さに、高温多湿の日本の夏の訪れを身を持って感じっていますが、会長は上記の様に、この「六月無礼」を地で行くような面白い滑稽句をお詠みですね。

会長 > 「節電や六月無礼を毎月に」ですね。「人間の軽さ甚平のせいにして」はいかがですか。「ステテコを脱ぎ礼服の人となる」このほうが可笑しいですね。「究極のクールビズ全裸に熱くなる」、これでは、節電になりませんね。

高橋 > ふふふ！先に挙げた句より、どんどん面白くなりますが、あまり遊んでいてばかりでは、叱られてしまいますね。もっとお聞きしたいところですが、今日の本題に参ります。今日は紅緑編「滑稽俳句集」の「冬時令」の部「初冬」「小春」「寒」です。

「時令」とは年中行事のことですね。寒そうな季語ばかりですので、少しは節電になるでしょうか？ご解説よろしくお願い致します。

初冬の穴ばかりなり芋の畠 鳴雪

きのふのに懲りて傘もつ小春哉 也有

あたたかに冬の日なたの寒さ哉 鬼貫

此鼻は市の戻りの寒さ哉 均水

あとに寝て火を消す役の寒さ哉 炊無

居風呂のあつうて入れぬ寒さ哉 也有

鷹匠も酒屋へそれる寒さかな 也有

我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴らす 蕪村

足輕のかたまつて行く寒さ哉 士朗

暮にまけて話もせざる寒さかな 鈞月

会長 > 「初冬の・・・」、俳句で「芋」といえば里芋のこと。里芋は株ごと抜きますから大きな穴が残ります。

「きのふのに・・・」、小春は冬の季語です。雨の翌日晴れあがったりしますから、前日に突然の雨で苦労したので傘を携行したところ 無用の長物となったということです。

「あたたかに・・・」、陽は当たっていても寒い冬、日向を詠んでいます。日向は暖かいという先入観がないだけに新鮮です。

「此鼻は・・・」、朝市の帰りですね。身体の先端部分から冷えますから、まあ一種の肉体寒暖計とでも言いますか。

「あとに寝て・・・」、火の用心は暮しの大切な心がけ。一家の主として最後に寒さを堪えつ火の始末をする暮らしぶりが描かれていますね。

「居風呂の・・・」、風呂が熱くて入れない。入らないと寒い、可笑しい風景です。

「鷹匠も・・・」、鷹匠は誇り高い仕事ですから、酒屋へ立ち寄る姿などは人目に曝

したくないでしょう。それほど寒いということですね。

「我を厭ふ・・・」、近所づきあいの難しさが正直に句に残りました。迷惑行為とするか、寒さゆえの行為か。

「足輕の・・・」、接触して体温を与え合い風も避ける。現代では考えられませんが、冬山登山ではこうしたこともあるでしょう。

「暮にまけて・・・」、負けると意気消沈して無口になり寒さが募りますね。反対に勝って高揚していると熱気で寒さを感じない。正直なものです。

高橋 > 句の人物になりきった面白いご解説、有難うございます。次の季語は「冬枯」「氷柱」「氷」です。

ドレミファの長短光る軒氷柱 八木健

会長にも上の様な氷柱の句がおありですね。ご一緒にご説明下さいね。

冬かれて馬鹿も利口もなかりけり 子規

かけはしに猿の折れたる氷柱⁴かな 鬼貫

岸草を引張て居る氷かな 五明

寒山寺鐘をつく人こほるべし 不關

禪の氷りつきたる盥かな 洗耳

会長 > 「ドレミファの長短光る軒氷柱」、あれは、いい音が出ます。氷琴ですね。演奏時間は短いから、コンサートは昼前ぐらいまで。瓢箪者が演奏します。

「冬かれて・・・」、冬枯状態は色彩がありませんから、句に詠んでも甲乙つけがたい作品ばかりとなります。冬枯には誰もが寒さに縮こまり、馬鹿だ利口だを云々の余裕もなくなりますね。

「かけはしに・・・」、「猿の折れたる」は、「猿が折った」ということですね。昔は猿は身近な存在でしたから、ちょっと裏山に入れば猿がいたのです。人気のない山陰の

氷柱が折れているのを見て、猿の仕業と断定したのです。

「岸草を…」、写生句ですね。擬人化の句でもあります。この句が、今どこかの句会に登場しても違和感はありません。つまり、擬人化は滑稽の基本ということです。

「寒山寺…」、著名な中国の寺の名が登場しました。寒山寺の鐘を撞いたから、「こぼる」つまり「氷る」。寺の名が「寒い」ですからね。「べし」はこの場合、断定的に「氷る筈だ」として、そこが可笑しい。

「禪の…」、写生句です。「禪(ふんどし)」を一晩、盥(たらい)に浸けておいた朝の出来事です。「禪の形の氷陽にかざす」ということになりますね。

高橋 > とても面白いご解説有難うございます。やはり、擬人化は滑稽の基本なのですね。続けてまいりますね。

次の季語は、「師走」、「行年」です。

訪ひ行けば訪ひ来て逢ぬ師走哉 宇呂

師走なんか一茶一切かまひなし 虚子

逃げて行く年やるまいぞやるまいぞ 竹護

会長 > 「訪ひ行けば…」、多忙な師走でも親しい間柄では訪問し合うのでしょうか。年末で、もう来年まで会えないからちょっと寄ったなどと訪問すれば、相手もちよっとそこまで…などと、可笑しいですね。

「師走なんか…」、「一茶」「一切」は掛詞です。師走などおかまい無し、「世俗」の雑事おかまいなし。童心溢れる句をつくる一茶を羨望しているのです。

「逃げて行く…」、行く年を逃げる年として、擬人化しています。まだ今年遣り残したことがあるのだから簡単に新年にはさせぬということですね。時間の経過はどうすることも出来ないことを、知らぬふりしてつくるのですね。

高橋 > 「やるまいぞやるまいぞ」なんて、狂言の節回しそっくりで面白いですね。次の「冬

時令」の季語は、「年暮」ですよ。ご説明下さいね。

怖くなり年暮るるよとうしろから 太祇

首括る縊る縄切もなし年のくれ 蕪村

梟よのほほん所か年の暮 一茶

口にはさまざまの事を申して年の暮 五明

質に入ると知らずや佛年のくれ 鳴雪

年暮借用實正也十二月廿四日 極堂

会長 > 「怖くなり…」、年が暮れてしまうと 脅される気分。急かされて背後からなにかが迫るようなものですね。

「首括る…」、貧乏の極みで首括って死ぬにも「縄の切れ端」さえない。という誇張です。蕪村は貧乏だったようですが…。

「梟よ…」、梟が「のほほん」としているのを見て一茶が梟に呼びかけているのです。私は「のほほん」所ではない、多忙じゃわいと。

「口には…」、これは、「さまざまを口に言わせて年の暮」とすれば、分かりやすいですね。甘える・叱る・脅す・拗ねる・ご勘弁をと平伏もある。どうか借金棒引きにしてください、ということでしょうか。

「質に入ると…」、知らぬが佛ですね。佛を質に入れるとは、自身のことだったのか、そういう人がいたということか。鳴雪のフィクションかも知れないが、鳴雪が面白がって作っていることは確かですね。

「年暮借用…」、「實正」は「つかまつりそうろう」と読む。金額は書かれていないが、借用証の文句ですね。

高橋 > 「實正」は、「つかまつりそうろう」と読むのですか。読めなくて困っていましたが、また一つ勉強になりました。次の季語は、「来年」「大三十日」です。

来年の眼前にある徳利かな 左衛門

貧乏に行きあたりけり大三十日 虚子

会長 > 「来年の・・・」、年末の句ですね。今年の分は飲み干して新年用の酒が「眼前」にあるというのですから、これは拷問に近いのでしょう。

「貧乏に・・・」、「大三十日」は「おおみそか」です。この一年の成果は、「貧乏」だけだったという自虐。「行きあたり」は、「ある目標」を目指していたということですね。行き当たったのが、貧乏という可笑しさですね。

高橋 > 面白いご解説有難うございます。今日も楽しい お話は尽きませんが、お時間が来てしまいました。 本日も虎造節でめて戴いて、終わりにさせて戴きたいと思っています。

会長 > 承知しましたよ。

♪初冬のおおお、ぬくぬくしてゐる女房はああ その名を小春と申しますう
う 陽あたりの良い縁側でええ 指すは将棋の飛車桂馬ああ♪♪